

堀辰雄「浄瑠璃寺の春」

— 新学習指導要領における「読むこと」の資質・能力の育成を目指して —

国語科 今 成 智 美

1. はじめに

堀辰雄の「浄瑠璃寺の春」は、昭和18年（1943）1月から8月にかけて「婦人公論」に「大和路・信濃路」として連載された七篇のうちの一つである。「その小見出しは、「一」「二」（のち「十月」と改題）、「三」（のち「古墳」と改題）、「野辺山原」（のち「斑雪」と改題）、「雪」（のち「櫓の上にて」と改題）、「辛夷の花」、「浄瑠璃寺（のち「浄瑠璃寺の春」と改題）」、『『死者の書』』となっている」¹⁾とある通り、連載当初は「浄瑠璃寺」として発表されたが、のち「浄瑠璃寺の春」と改題された。内容については「四月中旬、夫人と木曾路を回り、伊賀を経て大和の浄瑠璃寺や室生寺を訪ね、帰郷した」²⁾時の実体験をもとにした随筆であるが、神西清氏によって「その文学の展望をこころみる場合、小説とかエッセイとか随筆とかいふ形式上のジャンルの区わけは、ほとんど無意味だといってもいいくらいで、すべて堀辰雄作品といふ一様の名のもとに統合されるにふさはしい十分な文学的責任を持つてゐる。」³⁾と評価されている。また、「彼の古代への好尚と、その現代への反映が微妙にもつれあつた小品群で、おそらくこの作者後期の作品の中で最高峰であらう。」⁴⁾、『浄瑠璃寺の春』は、素材配置・構成・叙述の周到さとテーマへの執拗な粘着力のある表現意識において、特にすぐれた随筆と言うべきであろう。」⁵⁾と指摘されており、非常に文学的価値の高い作品であると言える。

本稿では、この「浄瑠璃寺の春」について概観するとともに、平成30年告示の新「学習指導要領」を踏まえた高等学校国語科授業への活用とそのあり方について考察していきたいと考える。

2. 「浄瑠璃寺の春」について

2.1. 「浄瑠璃寺の春」に関するこれまでの研究と主な論点

「浄瑠璃寺の春」に関する先行研究は非常に少ないが、全体のテーマとしては、「自然」と「人間」とが、また、「過去」と「現在」とが、たがいに相克矛盾するのではなく、まことに安らかに止揚融合されて、調和的な平和な状態でありうることへの堀辰雄の願い」⁶⁾を読みとるものや、「主人公の危機感の背後にあるのは第二次世界大戦下の日本社会だ。そして、この背後の時代と作品の世界とは、やはり根柢で分かちがたく結び合っているといわざるを得ない。」⁷⁾と、時代背景との関連を指摘するもの、また、絶えず死の恐怖によって生が脅かされている堀自身の境遇と重ねつつ、「現実社会から切り離された「虚」の世界に我が身を置くことによって、逆に日常生活のどんな些細なものまでもが、今までとは全く異なった魅力を持ち出す」⁸⁾という堀の「生の秩序」

をみるもの、「大和路・信濃路」の一編「浄瑠璃寺の春」における、小さな廃寺の明るい日だまりで寺の娘と話している妻から離れて、ひとりたたく私の思い。(中略) そのことそのものが、大和の「ふるさと」の形象であろう。」⁹⁾と堀辰雄における「ふるさと」のありかを論じるものなどがある。

先行研究において具体的に言及されてきた点は主に「作品構造」、「馬酔木の花の表現」、「僕」と登場人物(妻や寺の娘)との関係」の三点に集約できると考えられる。

まず、「作品構造」については、杉野要吉氏によって「全体は時間的区分の上から、旅行後の時点に立って総括的に旅を回顧する序の部分、浄瑠璃寺を舞台とした日中の事件の展開部、寺を立ち去り所を春日の森に移した夕暮れの場面と、以上三段に分けて考えられる。」¹⁰⁾と指摘されている通り、大きく三つの形式的部分から成るが、その時間軸が必ずしも直線的に進んでいるわけではないという点に注意したい。

また、「馬酔木の花の表現」については、長谷川孝士氏や杉野要吉氏によって「主要素材としての花馬酔木は、彼のあこがれやまぬ古代美のもっとも具体的な象徴として、ぬきさしならぬ配置と叙述によって、この一編のテーマを支えている」¹¹⁾、「僕」にとって馬酔木の花は、より本質的には万葉びとの世界、ひろげて古代への憧れの表象であった」¹²⁾と指摘されているように、作品内の重要なモチーフとしてたびたび登場している。この表現については、海老根英人氏が「馬酔木の花は「森厳なレクイエム」を奏でるには必要不可欠な魂振りの道具であったに相違ない。だから、馬酔木の花は、堀の魂振りによって、「妻の手まさぐり」から「大伯皇女の手まさぐり」を産み出し、堀の心に二重の映像を写し出すことになるのである。」¹³⁾と述べている通り、作品世界に重層性をもたらす大きな要因となっている。

さらに、「僕」と登場人物(妻や寺の娘)との関係」についても、「日常の実人生の世界を共有して住む「妻」・「寺の娘」(「村の「娘」) ↔ 日常の実人生から超脱した別世界を志向する「僕」というもう一つの新しい人間関係の対立構造が、そこに浮かび上がってくる」¹⁴⁾と指摘されているように、語り手「僕」という人物を理解し、その存在する世界を解釈する上で重要な要素として登場している。また、語り手「僕」から切り離された「妻」や「寺の娘」という人物の描写自体についても、「僕」をものや人を直接見得る位置に置き、僕が思索する内容を直叙するための方法である。会話を通じて、寺の様子を直接描写する以上に生き生きとした雰囲気を与え、また「寺の娘」の京都弁がひなびた山間の、のんびりした春の気分を醸成するという効果も生じている。」¹⁵⁾と述べられているように、表現上の工夫や効果のために意図的に描かれている。

以上のように「浄瑠璃寺の春」は、一見短い随筆という形式を取りながらも、実は非常に緻密な構成と卓越した表現のもとに展開されている作品であることがわかる。この「浄瑠璃寺の春」の主要な論点を踏まえた上で、次節以降、高等学校国語科授業での扱いについて検討していきたいと考える。

2.2. 「浄瑠璃寺の春」の高等学校教科書掲載状況

そもそも堀辰雄作品は、高等学校国語教科書への掲載自体が少なく、過去にはいくつかの『現代文』教科書に「麦藁帽子」（昭和7年（1932）9月「日本国民」に発表）や、「曠野」（昭和16年（1941）12月「改造」に発表）が掲載されていたが、「浄瑠璃寺の春」は現在ごく一部の『現代文B』教科書に見られるのみとなっている。その点については、長谷川孝士氏によって「堀辰雄の『浄瑠璃寺の春』という随筆は、時折り高等学校の国語教科書に採録されている。浄瑠璃寺境内の「平和で」「すこしく悲愴な懐古的気分」の色濃いこの作品は、たしかに、現実の生活への前向きな発条となるようなエネルギーを、そこに直接的に発見することはむずかしいし、どうかすると、現実をフェータルなものとして甘受するか、ないしは、その現実から遠く逃避するような作家の姿勢を感じとらせる傾きがあって、若い高校生からそれほど好まれる作品とは言いがたいようである。」¹⁶⁾と指摘されている。

「浄瑠璃寺の春」は、古くは昭和34年発行の『高等国語 二』¹⁷⁾に掲載されているが、そこでは単元名「小品」として扱われていた。「小品」とは、「小説のように筋を必ずしも必要としないが、随筆に比べれば構想があり、スケッチ風の文章で、（中略）詩に近いもの、随筆に近いもの、小説に近いものといろいろの種類があるが、それぞれ作者の持ち味がにじみ出ている」¹⁸⁾ものとされている。

このように、国語教科書への掲載例は少ないものの、前節でも述べたように「浄瑠璃寺の春」は作者の実体験にもとづく行動を追体験し文章を読み味わいながら、文学的文章の表現や構成、展開について触れることができる文学作品である。よって、前例は多くはないが、作品の特質を生かした学習指導計画の作成は可能であり、むしろこれからの新しい「学習指導要領」に則ってどのように高等学校国語科授業へと活用できるのか検討していく試みは重要であると考えられる。

2.3. 「浄瑠璃寺」について

国語科授業での単元構想を行うにあたっては、「浄瑠璃寺」とはどのような場所であるかも押さえておく必要がある。

「浄瑠璃寺（九体寺）」は京都の最南端、奈良との府県境に位置している寺であり、その境内について『真言律宗 小田原山 浄瑠璃寺（九体寺）』¹⁹⁾では、以下のように説明されている。

この寺は、東の薬師仏を祀る三重塔、中央宝池、西の九体阿弥陀堂から成り立っている。寺名は創建時のご本尊、薬師仏の浄土である浄瑠璃世界からつけられた。薬師仏は東方浄土の教主で、現実の苦悩を救い、目標の西方浄土へ送り出す遣送仏である。阿弥陀仏は西方未来の理想郷である楽土へ迎えてくれる来迎仏である。薬師に遣送されて出発し、この現世へ出て正しい生き方を教えてくれた釈迦仏の教えに従い、煩惱の河を越えて彼岸にある未来をめざし精進する。そうすれば、やがて阿弥陀仏に迎えられて西方浄土へ至ることができる。この寺では、まず東の薬師仏に苦悩の救済を願い、その前でふり返って池越しに彼岸の阿弥陀仏に來

迎を願うのが本来の礼拝の形である。

このように、池をはさんで、東西に向かい合う如来像が存在し、四季折々の花が咲く境内は、平安時代の末、人々の心をとらえた浄土思想を具現化して地上に現出させたような美しい世界を現在も残しており、平安期の堂・像共に現存するものとしては唯一となった九体阿弥陀仏（国宝）をごく身近に見ることのできる場所である。

「堀はまるで故郷をたずねるように何度も大和への旅を試みている。堀がこの大和路に見出したものは、もっとも日本的な風土であり、そこに「亡びゆくものへの愛」を見出したのであろう。」²⁰⁾と指摘されている通り、昭和12年に初めて京都を訪れて以来「大和路」の美しさに魅了されそれを文学へと著していく堀自身の姿も重ね合わせて見ることができる。

(*以下は参考資料。撮影は2017年8月。)



(浄瑠璃寺参道)



(本堂)



(三重塔)



(宝池)

3. 高等学校国語科における学習指導計画について

3.1. 新「学習指導要領（平成30年告示）」の概要と「文学国語」の扱い

平成30（2018）年告示の新「学習指導要領」では大規模な改訂がなされ、国語科の科目構成等をめぐり近年議論が活発になっている。とりわけ文学教育に対する危機感やこれからの国語教育における「文学」のあり方を危ぶむ声は強く、学校現場でも選択科目「文学国語」の扱いには苦慮しているところである。

まず、学習指導計画全体に共通する内容について確認しておくとして、「新学習指導要領においては、知・徳・体にわたる「生きる力」を子供たちに育むため、「何のために学ぶのか」という学習の意義を共有しながら、授業の創意工夫や教科書等の教材の改善を引き出していけるよう、全ての教科等を、①知識及び技能、②思考力、判断力、表現力等、③学びに向かう力、人間性等の三つの柱で再整理し、「何ができるようになるか」について明確化を図っている。」²¹⁾とあるように、今後は何ができるようになるかという「資質・能力」（指導事項）ベースの単元構想が求められている。

また、「高等学校学習指導要領 国語」（平成30年告示）²²⁾の目標は、以下のよう

言葉による見方・考え方を働かせ、言語活動を通して、国語で的確に理解し効果的に表現する資質・能力を次のとおり育成することを目指す。

- (1) 生涯にわたる社会生活に必要な国語について、その特質を理解し適切に使うことができるようにする。
- (2) 生涯にわたる社会生活における他者との関わりの中で伝え合う力を高め、思考力や想像力を伸ばす。
- (3) 言葉のもつ価値への認識を深めるとともに、言語感覚を磨き、我が国の言語文化の担い手としての自覚をもち、生涯にわたり国語を尊重してその能力の向上を図る態度を養う。

この目標に関して大滝一登氏は、「様々な事象の内容を、自然科学や社会科学等の視点から理解することを直接の学習目的としない国語科においては、言葉を通じた理解や表現及びそこで用いられる言葉そのものを学習対象としており、このため、「言葉による見方・考え方」を働かせることが、国語科において育成を目指す資質・能力をよりよく身に付けることにつながる事となる。」²³⁾と述べており、具体的には「言葉で表される語や文章を、意味や働き、使い方などの言葉の様々な側面から総合的に思考・判断し、理解したり表現したりすること、また、その理解や表現について、改めて言葉に着目して吟味することを示したものと云える。」と指摘している。

よって、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善や、問題を見いだして解決策を考えたり、思いや考えを基に創造したりすることに向かう過程を重視し

た学習の充実が強く求められる中でも、国語科においてはやはり「言葉」による知識を相互に関連付けてより深く理解したり、情報を精査して考えを形成したりすることを丁寧かつ十分におこなっていくことが大切であると考え。

次に選択科目「文学国語」についてであるが、「高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 国語編」²⁴⁾において、「文学国語」は「共通必修科目により育成された資質・能力を基盤とし、主として「思考力、判断力、表現力等」の感性・情緒の側面の力を育成する科目として、深く共感したり豊かに想像したりして、書いたり読んだりする資質・能力の育成を重視して新設した選択科目である。」と述べられている。また同解説の「国語科改訂の趣旨及び要点第1章 総説」によると、「知識及び技能」に関しては、「(1) 言葉の特徴や使い方に関する事項」に「情景の豊かさや心情の機微を表す語句」、「文学的な文章における文体の特徴や修辞などの表現の技法」に関することを取り上げた点、「思考力、判断力、表現力等」の「B読むこと」に関しては、「語り手の視点や場面の設定の仕方、表現の特色について評価することを通して、内容を解釈する」、「設定した題材に関連する複数の作品などを基に、自分のものの見方、感じ方、考え方を深める」などの指導事項を示すとともに、「作品の内容や形式について、書評を書いたり、自分の解釈や見解を基に議論したりする」、「演劇や映画の作品と基になった作品とを比較して、批評文や紹介文などをまとめる」などの言語活動を取り上げた点が、今回の改訂の趣旨及び要点であるとわかる。

以上のように、新「学習指導要領」において改善が求められている点と、前章までの「浄瑠璃寺の春」の概要を踏まえて、次節で、高等学校国語科「文学国語」における単元構想と学習指導計画の作成を行いたいと考える。

3.2. 高等学校国語科「文学国語」における学習指導計画

高等学校国語科 第2学年「文学国語」学習指導案

1 単元名

話し合いを通して文章の内容を理解し、読みを深める。([文学国語]「読むこと」)

2 単元で育成する資質・能力

内容や構成、展開、描写の仕方などを的確に捉え、語り手の視点や場面の設定の仕方、表現の特色について評価することを通して、内容を解釈する資質・能力。

3 単元の目標

- ・ 文学的な文章やそれに関する文章の種類や特徴などについて理解を深める。
([知識及び技能] (1) ウ)
- ・ 文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開、描写の仕方などを的確に捉える。
([思考力, 判断力, 表現力等]「B 読むこと」(1) ア)
- ・ 語り手の視点や場面の設定の仕方、表現の特色について評価することを通して、内容を解釈する。
([思考力, 判断力, 表現力等]「B 読むこと」(1) イ)
- ・ 内容や構成、展開、描写の仕方などを的確に捉えるとともに、語り手の視点や場面の設定の仕方、表現の特色について評価することを通して、内容を解釈しようとする。
([主体的に学習に取り組む態度])

4 取り上げる言語活動と教材

言語活動

作品の内容や形式について、書評を書いたり、自分の解釈や見解を基に議論したりする活動。
([B 読むこと](2) 言語活動 ア)

教材

堀辰雄「浄瑠璃寺の春」

5 単元の学習指導における具体的な評価規準

知識・技能	思考・判断・表現	主体的に学習に取り組む態度
文学的な文章やそれに関する文章の種類や特徴などについて理解することができる。	①文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開、描写の仕方などを的確に捉えることができる。 ②語り手の視点や場面の設定の仕方、表現の特色について評価することを通して、内容を解釈することができる。	内容や構成、展開、描写の仕方などを的確に捉えるとともに、語り手の視点や場面の設定の仕方、表現の特色について評価することを通して、内容を解釈し読みを深めようとしている。

6 単元における指導と評価の計画

		学習活動の展開（全6時間扱い）	
次	時	学習活動	具体的な【評価規準】と＜評価の方法＞
第一次	1	<p>○単元の目標を確認し、学習の見通しをもつ。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・話し合いを通して、内容や構成、展開、描写の仕方などを的確に捉え、語り手の視点や場面の設定の仕方、表現の特色について理解することが本単元のねらいであることを確認する。 <p>○作者について知る。</p> <p>○「浄瑠璃寺の春」を通読し、全体像を概観する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・疑問点をノートに書き出しておく。 	<p>文学的な文章やそれに関する文章の種類や特徴などについて理解することができている。</p> <p>【知識・技能】</p> <p>＜行動の観察＞</p> <p>＜記述の確認＞（ノート）</p>
第二次	2・3	<p>○前時の復習および自己評価ルーブリックを見て、本時の目標と達成度の目安を確認する。</p> <p>○グループで第一段落を読み、浄瑠璃寺にたどり着くまでの「僕」の回想を整理する。</p> <p>【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・時間の流れを整理し、場所の移動とともに移り変わる「僕」の心情の変化をまとめる。 ・第一段落の表現の特徴について考える。 ・自然の景物として描かれているものがどのような効果を持つか考える。 <p>（〈参考〉「万葉集」の馬酔木の和歌）</p> <p>（指導上の留意点）</p> <ul style="list-style-type: none"> *根拠を明確にして考察すること、最後にはグループでまとめた意見を発表することをあらかじめ伝えておく。 *机間指導を行い、話し合いが進んでいないグループには助言を行う。 *生徒から質問があれば受け付ける。 <p>○グループで考えたことを発表し、共有する。</p> <p>（指導上の留意点）</p> <ul style="list-style-type: none"> *できる限り本文から根拠を示した上で、聞き手に分かりやすく伝えることを意識させる。 *2分程度を目安に、話し合ったことを発表させる。他のグループの意見を聞いて新たな発見があれば、メモを取るよう伝える。 <p>○自己評価ルーブリックに記入する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本時の活動のねらいを意識して取り組むことができたかどうか確認し、自己評価する。 	<p>文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開、描写の仕方などを的確に捉えることができている。</p> <p>【思考・判断・表現】</p> <p>＜行動の確認＞</p> <p>＜記述の確認＞（ワークシート）</p> <p>語り手の視点や場面の設定の仕方、表現の特色について評価することを通して、内容を解釈することができている。</p> <p>【思考・判断・表現】</p> <p>＜行動の確認＞</p> <p>＜記述の確認＞（ワークシート）</p> <p>内容や構成、展開、描写の仕方などを的確に捉えるとともに、語り手の視点や場面の設定の仕方、表現の特色について評価することを通して、内容を解釈し読みを深めようとしている。</p> <p>【主体的に学習に取り組む態度】</p> <p>＜行動の確認＞</p> <p>＜記述の確認＞（自己評価ルーブリック）</p>

<p>第三次</p>	<p>○前時の復習および自己評価ルーブリックを見て、本時の目標と達成度の目安を確認する。</p> <p>○グループで第二段落を読み、浄瑠璃寺に到着した後の「僕」の心情を理解する。 【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・「僕」の行動を「妻」や「寺の娘」の行動と比較しながらまとめる。 ・「平和な気分」を表す情景を抜き出す。 ・「第二の自然が発生する」とはどういうことか考える。 <p>(指導上の留意点)</p> <ul style="list-style-type: none"> *根拠を明確にして考察すること、最後にはグループでまとめた意見を発表することをあらかじめ伝えておく。 *机間指導を行い、話し合いが進んでいないグループには助言を行う。 *生徒から質問があれば受け付ける。 <p>○グループで考えたことを発表し、共有する。</p> <p>(指導上の留意点)</p> <ul style="list-style-type: none"> *できる限り本文から根拠を示した上で、聞き手に分かりやすく伝えることを意識させる。 *2分程度を目安に、話し合ったことを発表させる。他のグループの意見を聞いて新たな発見があれば、メモを取るよう伝える。 <p>○自己評価ルーブリックに記入する。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本時の活動のねらいを意識して取り組むことができたかどうか確認し、自己評価する。 	<p>文章の種類を踏まえて、内容や構成、展開、描写の仕方などを的確に捉えることができている。</p> <p>【思考・判断・表現】</p> <p><行動の確認></p> <p><記述の確認> (ワークシート)</p> <p>語り手の視点や場面の設定の仕方、表現の特色について評価することを通して、内容を解釈することができている。</p> <p>【思考・判断・表現】</p> <p><行動の確認></p> <p><記述の確認> (ワークシート)</p> <p>内容や構成、展開、描写の仕方などを的確に捉えるとともに、語り手の視点や場面の設定の仕方、表現の特色について評価することを通して、内容を解釈し読みを深めようとしている。</p> <p>【主体的に学習に取り組む態度】</p> <p><行動の確認></p> <p><記述の確認> (自己評価ルーブリック)</p>
<p>第四次</p>	<p>○前時の復習および自己評価ルーブリックを見て、本時の目標と達成度の目安を確認する。</p> <p>○グループで第三段落を読んだ上で、作品全体について考えを深める。 【課題】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・浄瑠璃寺から帰ってきた「僕」の様子はどのように描かれているか考える。 ・第三段落の表現の特色について考える。 ・末尾の一文が作品全体にもたらす効果について考える。 <p>○グループで考えたことを全体に発表し共有する。</p>	<p>語り手の視点や場面の設定の仕方、表現の特色について評価することを通して、内容を解釈することができている。</p> <p>【思考・判断・表現】</p> <p><行動の確認></p> <p><記述の確認> (ワークシート)</p> <p>文学的な文章やそれに関する文章の種類や特徴などについて理解することができている。</p> <p>【知識・技能】</p> <p><行動の分析></p> <p><記述の分析> (ワークシート) (学習の振り返りシート) (自己評価ルーブリック)</p>

	<p>(指導上の留意点)</p> <p>*できる限り本文から根拠を示した上で、聞き手に分かりやすく伝えることを意識させる。</p> <p>*2分程度を目安に、話し合ったことを発表させる。他のグループの意見を聞いて新たな発見があれば、メモを取るよう伝える。</p> <p>○単元における学習を振り返る。</p> <p>○自己評価ルーブリックおよび学習の振り返りシートに記入する。</p> <p>・本時の活動のねらいを意識して取り組むことができたかどうか確認し、自己評価する。「学習の振り返り」を記入する。</p>	<p>内容や構成、展開、描写の仕方などを的確に捉えるとともに、語り手の視点や場面の設定の仕方、表現の特色について評価することを通して、内容を解釈し読みを深めようとしている。</p> <p>【主体的に学習に取り組む態度】</p> <p><行動の分析></p> <p><記述の分析>(学習の振り返りシート)(自己評価ルーブリック)</p>
--	---	--

○ 学習活動の概要とねらい

この単元は、グループでの話し合いを通して堀辰雄の「浄瑠璃寺の春」の文章表現の特色を読み味わい解釈していくことで、読解を深めさせることをねらいとした学習活動である。4～6人程度の少人数のグループで、文学的な文章の表現の特色や内容、構成等について話し合いながら読解を進めていくことで、一斉授業や個人作業の中では気づき得なかった点について気付くことができたり、議論を進めていく中で、生徒自身が主体的に文章に関わったりすることが期待できる。

学習活動の展開については、全6時間扱いとし、ワークシートを使用しながらグループで「浄瑠璃寺の春」を文章の展開に沿って読み進めていき、文章の構成、表現の特色とその効果等について考察した上で、クラス全体で共有する。特に、時間の推移と場所の移動とともに移り変わる語り手「僕」の心情の変化がどのように表現されているかについて着目しながら、分析させたい。

活動にあたっては、発言が一部の生徒に偏らないように工夫すると共に、自己評価ルーブリックで達成度を明らかにし、全員の積極的な参加を促したい。

堀辰雄「浄瑠璃寺の春」 ワークシート

グループ() メンバー()

第一段落 浄瑠璃寺にたどり着くまでの「僕」の回想を整理してみよう

時間	場所	自然の景物	「僕」の心情

◎ 第一段落の表現の特色について考えてみよう

堀原雄「浄瑠璃寺の春」 ワークシート2

グループ () メンバー ()

【参考】「馬酔木」が出てくる『万葉集』の歌

(*万葉集には、全部で一〇首「馬酔木」を含む歌がある。)

磯の上に生ふる馬酔木を手折らめど見すべき君が在りと言はなくに (二巻・一六六)

(現代語訳：岩のあたりに生い茂る馬酔木の枝を手折りたいとは思うけれども、これを見せることのできる君がこの世にいるとは、誰か言ってくれないではないか。)

馬酔木なす栄えし君が掘りし井の石井の水は飲めど飽かぬかも (七巻・一一二八)

(現代語訳：馬酔木の花のように栄えた君が掘られた井戸、石で囲ったその井戸の水は、飲んでも飲んでも飽かぬかもしれない。)

我が背子に我が恋ふらくは奥山の馬酔木の花の今盛りなり (十巻・一九〇三)

(現代語訳：いとしいあの方に私がひそかに恋い焦がれる思いは、奥山に人知れず咲き来ている馬酔木の花のように、今が真の盛りだ。)

池水に影さく見えて咲きにはふ馬酔木の花を袖に扱入れな (二〇巻・四五二二)

(現代語訳：お池の水の面に影まできつみり映しながら咲きはこつている馬酔木の花、ああ、このかわいい花をうしろで、袖の上に取らなうそではないか。)

磯影の見ゆる池水照るまでに咲ける馬酔木の散らまく惜しも (二〇巻・四五二二)

(現代語訳：磯の影がくつみり映っている池の水、その水も照り輝くばかりに咲きはこる馬酔木の花が、散ってしまったのは惜しまれてならない。)

考えてみよう！

◎『万葉集』で「馬酔木」はどのような花として詠まれているだろう

堀辰雄「浄瑠璃寺の春」 ワークシート3

グループ() メンバー()

第二段落 浄瑠璃寺での「僕」の行動を「妻」・「寺の娘」と比較してみよう

「僕」の行動	「妻」・「寺の娘」の行動

◎ 比較してわかったこと・気づいたこと

◎ 「平和な気分」を表している情景を抜き出してみよう

◎ 「第二の自然が発生する」とはどういうことだろうか

堀辰雄「浄瑠璃寺の春」 ワークシート4

グループ() メンバー()

第三段落 浄瑠璃寺から帰ってきた「僕」の様子がわかる表現を抜き出してみよう

◎第三段落の表現の特色について気づいたことを挙げてみよう

◎末尾の一文が作品全体にもたらす効果について考えてみよう

〈自分のグループの考え〉

〈他のグループの考え〉

3.3. 評価について

「学習評価は、昭和23（1948）年の学籍簿の改訂から約70年を経て、生徒に序列をつけ集団の中での成績の位置を示す評価（Evaluation）から、生徒一人一人の資質・能力を育成するための支援としての評価（Assessment）への転換が迫られている」²⁵⁾とあるように、現在そのあり方も大きく変わろうとしている。

今回、評価規準については、【知識・技能】、【思考・判断・表現】、【主体的に学習に取り組む態度】の三観点に基づいて作成しているが、評価方法については、国立教育政策研究所の「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料（高等学校 国語）～新しい学習指導要領を踏まえた生徒一人一人の学習の確実な定着にむけて～」²⁶⁾をもとに、以下の3段階で設定した。ただし、これは現段階でのものであり、評価規準の設定の仕方や評価方法のあり方については今後変更になる可能性もある。

＜評価の方法＞

① 観察、点検

- ・行動の観察：学習の中で、評価規準が求めている発言や行動などが行われているかどうかを「観察」する。
- ・記述の点検：学習の中で、評価規準が求めている内容が記述されているかどうかを、机間指導などにより「点検」する。

② 確認

- ・行動の確認：学習の中での発言や行動などの内容が、評価規準を満たしているかどうかを「確認」する。
- ・記述の確認：学習の中で記述された内容が、評価規準を満たしているかどうかを、ノートや提出物などにより「確認」する。

③ 分析

- ・行動の分析：「行動の観察」や「行動の確認」を踏まえて「分析」を行うことにより、評価規準に照らして実現状況の高まりを評価する。
- ・記述の分析：「記述の点検」や「記述の確認」を踏まえて、ノートや提出物などの「分析」を行うことにより、評価規準に照らして実現状況の高まりを評価する。

3.4. 今後の課題

本章3.2.では、高等学校第2学年の比較的早い段階を想定し言語活動を重視した上で、「内容や構成、展開、描写の仕方などを的確に捉えること」「語り手の視点や場面の設定の仕方、表現の特色について評価することを通して、内容を解釈すること」を育成したい資質・能力の中心に据えた学習指導計画を作成した。やや発展的な探究的学習の要素は少ないが、この学習を契機として作品の分析や解釈の仕方の基本を理解した上で、「探究的学習」へと進んでいくことが望ましいと考える。具体的には、文学的文章を読んで「作品の内容や形式に対する評価について、評論や解説を参考にしながら、論述したり討論したりする活動。」（B 読むこと）（2）言語活動 イ）や、

自らテーマを立てて「作品に関連のある事柄について様々な資料を調べ、その成果を発表したり短い論文などにまとめたりする活動。」(「B 読むこと」(2) 言語活動 カ)へとつなげていけるとよい。

また、今回は一単元の構想のみを具体的に取り上げる形になったが、「新学習指導要領の実施に向けて、その目標および内容を踏まえ、年間の単元を資質・能力ベースでどのように意図的・計画的に構想するかが大切である。」²⁷⁾とあるように、目指す資質・能力の育成を明確にした単元計画を積み上げた「年間指導計画」に基づいて指導を行うことが求められる。本稿では、年間指導計画までは示すことができていないが、今後の課題としたい。加えて、当然のことながら学校全体のカリキュラム・マネジメントを踏まえて、国語科の果たすべき役割を明確にし「言葉による見方・考え方」を身につけさせるための授業改善が必要である。その点を意識しつつ、生徒の深い学びを実現するための言語活動を始めとする授業の工夫や、主体的に学習活動に取り組みせ、協働的な学びにつながるような授業の改善を心掛けていきたい。

4. おわりに

本稿では堀辰雄の「浄瑠璃寺の春」を取り上げ、その全体像や論点について概観した後、新学習指導要領における高等学校国語科「文学国語」の単元構想へとつなげてきた。この点については「資質・能力ベース」ではなく「教材ありき」の単元構想になっているのではないかとの指摘もあるかもしれない。しかし、「教材ありき」の発想からの脱却は、教材を軽視することとは全く異なる。むしろこれからの方向性としては、「教材ありき」の授業に比べて、教材研究の重要性は一層増してくる」²⁸⁾と述べられているように、教材を今まで以上に深く研究し理解することで、「目指す資質・能力を軸とした単元構想」ができるようになるのだと考える。そのためにも、引き続き教材に関する理解を深めていくことが重要だ。

最後になるが、「浄瑠璃寺の春」は、今から 65 年前の昭和 30 年 (1955) 発行『中学生文学全集 21』²⁹⁾にも掲載されている。その「はじめのことば」で当時の中学生に向けて、編者は次のように述べている。

いまの中学生には、考えることが足りないとよくいわれる。みなさんは、はたしてどうであろうか。(中略) 人間が考えることを忘れたら、人間らしさもなくなるだろうし、人間の進歩は望めない。ほんとうの文化は、人間が人間らしく考えるところから生まれるのではなからうか。(中略)

堀辰雄の文学は、人間の美しさを、人間の愉しさを、人間の尊さを、そして人間の真の幸福が何であるのかを、しみじみとわたしたちに考えさせてくれる。そこからみなさんなりの生きかたを見いだすこともできよう。それが、堀辰雄の作品のいのち³⁰⁾にふれる道であるように思う。

同書の編者も述べている「文学の鑑賞は、生活にうるおいを与え、人間性を高めるものである。」という文学の普遍性と意義を忘れずに今後も教育活動に取り組んでいきたい。

注

- 1) 堀多恵子編『現代の随想 12 堀辰雄集』(彌生書房, 1981.7)
- 2) 竹内清己『日本の作家 100 人 堀辰雄一人と文学』(勉誠出版, 2004.12)
- 3) 神西清『堀辰雄文学の魅力』(踏青社, 1986.9)
- 4) 注 3) 参照。
- 5) 長谷川孝士「堀辰雄『浄瑠璃寺の春』に関する考察—その主題と構成を中心に—」(「愛媛大学紀要」(12), p39-50, 1966.12)
- 6) 注 5) 参照。
- 7) 杉野要吉「浄瑠璃寺の春 < 堀辰雄 > 作品の構造の分析(作品論への招待(特集))」(「国文学解釈と教材の研究」13(9), p61-66, 1968.7)
- 8) 海老根英人「堀辰雄「浄瑠璃寺の春」論—そのイデイルの世界—」(「駒場東邦研究紀要」(11), p27-40, 1980.3)
- 9) 小久保実『論集・堀辰雄』(風信社, 1985.2)
- 10) 注 7) 参照。
- 11) 注 5) 参照。
- 12) 注 7) 参照。
- 13) 注 8) 参照。
- 14) 注 7) 参照。
- 15) 中島昭「堀辰雄『大和路・信濃路』試論—「辛夷の花」・「浄瑠璃寺の春」を中心として—」(「昭和文学研究」(13), p39-50, 1986.7)
- 16) 注 5) 参照。
- 17) 金田一京助『高等国語二 四訂版』(三省堂, 1959.3)
- 18) 松岡勲鉄「堀辰雄「浄瑠璃寺の春」< 教材研究 >」(「国語教育研究」(8), p882-890, 1963.12)
- 19) 『真言律宗小田原山浄瑠璃寺(九体寺)』(発行: 小田原山浄瑠璃寺, 2014.12)
- 20) 福田清人/飯島文/横田玲子『堀辰雄 人と作品』(新装版)(清水書院, 2017.9)
- 21) 大滝一登・高木展郎『新学習指導要領対応 高校の国語授業はこう変わる』(三省堂, 2018.9)
- 22) 文部科学省『高等学校学習指導要領(平成 30 年告示)』(2018.3)
https://www.mext.go.jp/content/1384661_6_1_3.pdf
- 23) 注 21) 参照。
- 24) 文部科学省『高等学校学習指導要領(平成 30 年告示)解説 国語編』(2018.7)
https://www.mext.go.jp/content/1407073_02_1_2.pdf
- 25) 大滝一登『高校国語 新学習指導要領をふまえた授業づくり 実践編 資質・能力を育成する 14 事例』(明治書院, 2019.3)
- 26) 「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料(高等学校 国語) ~新しい学習指導要領を踏まえた生徒一人一人の学習の確実な定着にむけて

～」(国立教育政策研究所教育課程研究センター, 2012.7)

https://www.nier.go.jp/kaihatsu/hyouka/kou/01_kou_kokugo.pdf

27) 大滝一登『高校国語 新学習指導要領をふまえた授業づくり 理論編』(明治書院, 2018.12)

28) 注 27) 参照。

29) 吉田精一(他)編『中学生文学全集 21』(新紀元社, 1955.10)

参考文献一覧

- ・ 吉田精一(他)編『中学生文学全集 21』(新紀元社, 1955.10)
- ・ 金田一京助『高等国語二 四訂版』(三省堂, 1959.3)
- ・ 松岡勲鉄「堀辰雄「浄瑠璃寺の春」<教材研究>」(「国語教育研究」(8), p882-890, 1963.12)
- ・ 長谷川孝士「堀辰雄『浄瑠璃寺の春』に関する考察—その主題と構成を中心に—」(「愛媛大学紀要」(12), p39-50, 1966.12)
- ・ 杉野要吉「浄瑠璃寺の春 <堀辰雄> 作品の構造の分析(作品論への招待(特集))」(「国文学解釈と教材の研究」13(9), p61-66, 1968.7)
- ・ 海老根英人「堀辰雄「浄瑠璃寺の春」論—そのイデイルの世界—」(「駒場東邦研究紀要」(11), p27-40, 1980.3)
- ・ 堀多恵子編『現代の随想 12 堀辰雄集』(彌生書房, 1981.7)
- ・ 小久保実『論集・堀辰雄』(風信社, 1985.2)
- ・ 中島昭「堀辰雄『大和路・信濃路』試論—「辛夷の花」・「浄瑠璃寺の春」を中心として—」(「昭和文学研究」(13), p39-50, 1986.7)
- ・ 神西清『堀辰雄文学の魅力』(踏青社, 1986.9)
- ・ 竹内清己『日本の作家 100 人 堀辰雄一人と文学』(勉誠出版, 2004.12)
- ・ 「評価規準の作成、評価方法等の工夫改善のための参考資料(高等学校 国語)～新しい学習指導要領を踏まえた生徒一人一人の学習の確実な定着にむけて～」(国立教育政策研究所教育課程研究センター, 2012.7)
- ・ 『真言律宗小田原山浄瑠璃寺(九体寺)』(小田原山浄瑠璃寺, 2014.12)
- ・ 福田清人/飯島文/横田玲子『堀辰雄 人と作品』(新装版)(清水書院, 2017.9)
- ・ 文部科学省『高等学校学習指導要領(平成 30 年告示)』(2018.3)
- ・ 文部科学省『高等学校学習指導要領(平成 30 年告示)解説 国語編』(2018.7)
- ・ 大滝一登・高木展郎『新学習指導要領対応 高校の国語授業はこう変わる』(三省堂, 2018.9)
- ・ 大滝一登『高校国語 新学習指導要領をふまえた授業づくり 理論編』(明治書院, 2018.12)
- ・ 大滝一登『高校国語 新学習指導要領をふまえた授業づくり 実践編 資質・能力を育成する 14 事例』(明治書院, 2019.3)

